

## 境界なき差別

丘 浅次郎

—

此の題目を見て、奇態（風変<sup>わり</sup>）な題と考える人が有るかも知れぬ。差別が有れば、其の間に境界が有る筈、境界が無ければ、其の両側には差別は無い筈であるから、「境界なき差別」と云うのは題目自身の中に已<sup>すで</sup>に矛盾を含んで居ると考える人が有るかも知れぬ。併<sup>しか</sup>し此所に述べんとする事柄に対しては「差別は有り境界は無し」との一句で全部を言い尽し得る故、之よりも尚<sup>なほ</sup>一層適切な題目を附けることは出来ぬ。実物に就いて自然物を研究する人は「境界なき差別」に絶えず遭遇する。例えば、脊に三本縦縞のある蛭<sup>ひる</sup>の標本と脊に一本の縦縞のある蛭<sup>ひる</sup>の標本とを比較すると其の間の差別は実に明瞭で、此の二種の間には判然たる境界が有る如くに思われるが、実物を多数集めて見ると、二者の中間の性質を帯びたものが幾らもあり、三本の縦縞の中、両側にある二本の色が甚だしく淡いものもあれば、中央にある明<sup>あきらか</sup>な一本の外に両側になお一本づつ微<sup>かすか</sup>な縦縞の見えるものなども有って、此等を順に並べて見ると、到底何所にも判然と境界を定めることが出来なく成る。また蛭<sup>ひる</sup>には体の後端に吸盤が有り、蛆<sup>みみず</sup>類には吸盤が無い故、普通の蛭<sup>ひる</sup>類と普通の蛆<sup>みみず</sup>類とを比べて見ると、其の差別は明瞭で、其の間の境界も判然と有る如<sup>ごと</sup>くに思われるが、よく調べると、苔の下などに居る

陸産の蛭ひるの類には吸盤の無いものがあり、他物に吸い附いて生活する蛆みみずの類には体の後端に立派な吸盤を備えたものが幾らもある。此等は昔は蛭ひる類の仲間に入れてあつたが、段々身体の構造を調べた結果、今日では蛆みみず類の方へ籍を移された。斯かかる次第である故、模範的の蛭ひると、模範的の蛆みみずとの間には極めて明あきらかな差別が有りながら、蛭ひる類と蛆みみず類との境界は何所どこに有るかと思ねられると、誰も正確に答えることは出来ぬ。斯か様に差別は有りながら境界は無いと云うことは、蛭ひるや蛆みみずに限る訳では無い。如何いかに差別の著しい種類の間でも、丁寧調べて見ると、必ず中間の性質を帯びたものが其の間にあつて、結局、境界は定められぬ。今日生存する動物種族の中で、鳥類と蜥蜴とかげ類とは外観も習性も随分甚だしく異なり、之は鳥類か又は蜥蜴とかげ類かと云う疑問の起るような曖昧な動物は一種も無いから、二者の間の境界は頗すこぶる判然たる如ごとくに見える。然しかるに古代の地層から掘り出された化石を調べると、嘴くちばしに歯の生えた鳥、翼に爪のある鳥、後足で立つて歩く蜥蜴とかげ、空中を飛ぶ蜥蜴とかげなど、恰あたかも鳥類の特徴と蜥蜴とかげ類の特徴とを七分三分とか四分六分とかに合せた如き性質のものが幾らもあり、両方の性質を五分五分に兼ね備えた種類に至つては、全く鳥類と蜥蜴とかげ類との中間に位するから、鳥類と蜥蜴とかげ類との間の境界は全く無いと云わねばならぬ。また動物を胎生する類と卵生する類とに分けるが、胎生にも卵生にも種々の階級があつて、生まれたばかりの卵の中に、已すでに子供の形の出来上つて居るものも有れば、形の未だ整わぬ中に早くも母胎から産み出されるものも有つて、其の間の境界は決して判然せぬ。哺乳類は胎生するのが規則であるが、オーストラリア地方に産する二三の珍らしい種類では鳥類の卵に似た卵を産み落す。而しかも、其の内部には已すでに胎児の形が相応に出来て居る。魚類は普通は卵生であるが、鮫さめ類の中には胎生する種類が幾らもあり、而しかも胎児には母体から滋養分を取るための胎盤ごもとの如きものが附いてあるから、頗すこぶる獸類の胎生に似て居る。脊椎動物には体の中軸に脊骨が有り、無脊椎動物には決し

て脊骨が無いと云えば、其の間の境界は、極めて判然して居る如くに聞えるが、実物に就いて調査すると、發生の途中に一度脊骨が出来て、後に再び之を失うもの、僅に脊骨の痕跡のみを有する者などが、幾らもあつて、決して明な境界は無い、それ故、昔は無脊椎動物と見做されたもので、今日は脊椎動物の方へ移し換えられたものが何種類もある。動物と植物とを比べても、犬猫や、梅桜などの如き高等の種類だけを見ると、其の間の境界は、極めて明であるように思われるが、段々下等の種類を比較すると、終には到底区別が出来なく成る。根が生えて動かぬ虫や、尾を振うて遊ぶ藻の仲間には、藻とも虫とも判断し兼ねる如き生物が幾らもあるが、斯様な種類は動物学の書物には動物として記載し、植物学の書物には植物として記載してある。我らは常々斯くの如き、差別あつて境界なきもの許りを見慣れて居る故、生物以外のものを見るに當つても、相異なつたものの中に明な境界が有るか否かを先ず疑うて掛かる習慣が附いて、何事を論ずるに當つても、先ず第一に、境界の有無を考へて見るが、斯くすると、世人が当然境界の有る如くに思うて居る所にも実は決して明な境界の無いことを発見する。差別あつて境界の無いことの誰にも明白に知れるものも素より頗る多い。例えば晴天、雨天と云う如きも、其の一例であるが、日が照つて居れば確に晴天、雨が降つて居れば確に雨天で、其の差別は極めて著しいが、其の間には種々の程度の曇天があつて、晴天と見做すべきか、雨天と心得て然るべきか、判断に苦しむ様な天気も中々多い。狐の嫁入りなどと名づけて、日が照りながら雨が降ることさえ決して稀でない。夕立の後に現われる虹の如きは、境界なき差別の模範的の好例で、七色の差別は誰の目にも明であるが、判然たる境界は何所を探しても決して無い。赤より樺、樺より黄、黄より緑と、順々に移り行くだけで、急に段が附いて、一の色から他の色に飛び越す如き所は何所にも見附からぬ。春夏秋冬の四季の変化の如きも、之と同様で、夏は暑く、冬は寒く、春は桜の花が咲き、秋は楓の葉

が紅くなつて、其の差別は誰にも明瞭に知れるが、其の間に判然たる境界は決して無い。曆を見れば、何月何日の何時いつ何分何秒から春に成るとか夏に成るとか書いてあるが無論其の時刻に急激な変化が起る訳ではなく、冬は何時いつとはなしに自然に春となり、春は何時いつとはなしに自然に夏となり、其の間に氣候が次第次第に暖く成り行くのみである。昼夜の別も、其の通りで、昼は明るく、夜は暗く、其の差別は著しいが、夜が明けて朝となるときも、日が暮れて夜と成るときも、決して判然たる境界は無い。其の他透明なものと、不透明なものとの間には種々の程度の半透明なものが有り、個体と液体との間には種々の程度の半流動状のものがある。濃い葛湯くずゆが凝まつて葛餅くずもちと成る間には、今迄は液体、今からが固形体と云うように、其の境界を示し得べき時刻は決して無い。

更に例を取つて見るに、醒さめて居るときは意識が有ると云い、眠つて居るときは意識が無いと云うが、之も其の間に判然たる境界は無い。朝目覚めるときも、夜寝入るときも、無意識から有意識へ、若もしくは有意識から無意識へと移り行く間には実に無数の半意識的狀態を経過するから、其の有様は夜が明けて朝となり、日が暮れて夜に成るのと、少しも違わぬ。賢愚の別も、其の通りで、賢人と愚物とを比較すれば、其の間の差別は誠に明瞭であるが、其の間には賢七愚三とか、賢四愚六とか賢愚五分五分とか云う様な種々な程度の人間が限り無くある故、到底明瞭な境界線を定めることは出来ぬ。健康と病氣とか老と若とか、新と旧とか、大と小とか、軽と重とか云うように相對する名称の附けてある事柄は、何れも両端を比較すると、其の差別は明であるに拘からず、其の間に境界線を附けられぬもの許ばりである。

学問や芸術の区別にも同様なことが有る。動物と植物との境界が無い以上は、之を研究する動物学と植物学との間には素もとより境は無い。物理学と化学との間には密接な関係がある故、境界線を定めて切り離すこと

は出来ぬ。今日では物理化学と云うて名前からして両方に跨った一学科がある。画えも純粹な日本画と純粹な西洋画とは余程違うから素人にも差別が知れるが、折衷派になると、何れいづに属するとも云われぬ。また画えは平面、彫刻は立体のもので、其の差別は誰にも明らかであるが、画えの方にも随分絵の具を山の様に盛り上げたものが有り、彫刻の方にも平面に影り附けたものが有つて、何方の領分に属するか分り兼ねるようなものも有る。外国貨幣の表にある人の顔の彫刻に絵の具を塗つたとすれば、之は画えとも云えば、彫刻とも云えるであらう。義太夫ぎだゆう（浄瑠璃じやうるりのこと）とか常磐津とぎわづ（浄瑠璃じやうるりの一）とか云うものも、無論その間に明らかな差別が有ろうが、下手へたな者が語ると何れいづか分らぬ様にもなる。芝居と活動写真（映画）との如きごとも、之を半々に相混ずると、其の間あきらかのものが出来上がる。

### 三

以上は何れいづも差別のある二つの物を取つて、其の間に境界の無いことを述べたのであるが、相手無しに唯一つの物に就いて、其の終点を調べて見ても、また決して判然たる境界は無い。雲は其の最も好よい例で雲の形は明らかに見えて居ながら、其の周辺に判然たる境界線を見出すことは出来ぬ。昔の支那や日本の画えでは明あきらかな線を以て雲の輪廓を画いてあるが、実物を見れば、無論斯かかるものは無い。富士山へでも登れば、自身みづかが幾度か雲の中に入り、又雲から出るが、何時いつも知らぬ間に次第に出入するだけで、決して今から雲に入るとか、今雲を出たとか云い得るような判然たる境界は無い。雲は掴つかまえ難がたいものの例として何時いつも引き合あひに出される物故、之は特別であると考え人が有るかも知れぬが、他の物でも理窟は全く之と同じである。例えば紙の裁ち切つた縁は一直線をなして、境界が極めて判然してある如ごとくに見えるが、之を千倍の顕微鏡

で見れば、多数の繊維が入り乱れて恰も竹藪の如くである故、何所までが紙の領分で、何所からが紙の領分以外であるか全く判然せぬ。それ故、若し人間が今より何千分の一か、何万分の一かの極めて微細な身体を持つて居たと想像すれば、紙の縁を通過するときには、恰も普通の人間が、雲に出入するときと同様で、到底明瞭な境界を見ることは出来ぬであろう。地図を見れば島の周囲を明らかな沿岸線で示してあるが、実地浜辺へ出て見ると、浪が寄せては返して居る故、陸の領分が何所まで達し、何所で終るかを示すことは出来ぬ。斯く境界の定められぬのは、空間に対してのみではなく、時間に於ても其の通りで、人の生命の如きも通常何年何月何日の何時何分に生まれ、何年何月何日の何時何分に死んだと云うて、生まれた時も、死んだ時も、各々明らかな一点の如くに云うては居るが、實際生まれるに当っては、生まれ始めてから生まれ終るまでの移り行きがあり、死ぬに当つても、死に始めてから死に終るまでの移り行きがあるから、決して時の一点を指して、之が生まれた時、之が死んだ時と指し示す訳には行かぬ。電灯の撮みを捻れば、其の途端に光が現われ、また之を捻れば、其の途端に光が消えて、光つて居た時の始め終りには確乎たる境界が有る如くに感ずるが、之もよく考えて見ると、境界は無い。電球内の細い線が微に光り始めてから、十分の光を発するまでには、順々の移り行きがあり、光が僅に弱り始めてから完全に消え終るまでの間にも順々の移り行きがある故、仮に七十年の人間の寿命を一日に縮め、一秒に対する時の長さの感じを今日の人間が一日に対する長さの感じと同様にしたと想像すれば、電灯が附いて明るくなるときには恰も夜が明けて朝と成るのと同様な移り行きを感ずるであろう。また電灯が消えて、暗くなるときには恰も日が暮れて夜となるときと同様な移り行きを感ずるであろうから、到底明な境界を定めることは出来ぬに違いない。

なお通常相対立させて用いて居る言葉の中には、實際対等でないものが幾らもある。例えば動と静と云う

如きは其の一で、世人は一般に動と静とを相反するものとして、其の間に確な境界がある如くに見做して居るが、よく考えて見ると、動と云う中には劇しい動から、微かな動まで無数の階級があり、微の極に達した所が即ち静であるから、動と静とは決して相對立せしむべき性質のものではなく、静は寧ろ無数に変化のある動の中の一の特殊の場合と見做すべきものである。曲と直と云うのも之と同様で、曲と云う中には、甚だしい曲から極めて微かな曲まで無限の変化があり、最も微かな曲が即ち直である故、直は寧ろ曲の中の一種とも見做せる。有と無との區別も、其の通りで、有の方には明らかに有るのから微かに有るのまで無限の階級があり、其の一方の端が無であるから、前と同じ筆法で論ずれば、無は当然有の中の一種と見ねばならぬ。また仮説と事実との關係も之に似たもので、仮説の中には、頗る真らしからぬものから、余程確らしいものまで様々の階級があり、其の中の最も真らしいものを事実と見做して居るに過ぎぬ。地球が丸いと云うことも、地球が太陽の周囲を廻転すると云うことも、今では事実と見做されて居るが、昔はただ仮説に過ぎなかつた。今日と雖ども地球は丸くないと唱える人もあるが、其人から見れば、地球の丸いと云うことは、事実でなくて、誤つた仮説と考えられて居るであらう。

#### 四

我らは常々斯様に考える故、何れの方面を見ても、差別は有つて境界は無いと云うのが宇宙の真相である如くに感ずる。差別は有るが境界は無いと云うのが宇宙の真相であるとすれば、有る差別を無いと思うのも誤りであり、無い境界を有りと見做すのも誤りである。差別の有ることにのみ注意すると、兎角、境界の無い所に境界ありと信ずる誤りに陥り易く、境界の無いことにのみ注意すると、兎角、有る差別をも之を無視

するの弊に陥り易い。されば何事を論ずるに當つても、「差別は有り境界は無し」と云う根本の事実を常に念頭から離さぬようにして、両方に注意せぬと、何れか一方の誤りに陥るを免れぬ。

さて斯くの如く、實際に境界の無いものを捕えて、何故世人は一般に境界あるものと思ひ込むに至つたかと云うに、我らの考えによれば、之は、全く人類が言語を用いて思考するためである。元來、物の名は、他物と区別するために附けたもの故、悉く差別に基づいて名づけてあつて、他に移り行く所などは暫く度外視してある。虹の七色の名称などは即ち其の適例で、特徴の明らかに現われた部分の外には名は附けてない。地面の著しく高まつた所には何山と云う名を附け、地面の目立つて広い所には何原と云う名を附けるが、其の境界の漠然たることは当分構わずに置く。自分の身体に就いて見ても、手とか腕とか肩とか頸とか、各部に名称は附けてあるが、其の間に厳しい境は定めてない。併し境界は定めてなくとも、各部に名が附けてありさえすれば、腕に怪我をしたとか、頸に腫物が出来たとか云う今日の談話には何の差支えも無い。実物を目の前に置いて調べるような学問を修める者は、物の名称とは總べて斯かる性質のものであることを忘れる虞は無いが、実物を離れて、ただ言葉のみを以て考える人々は、一つ一つの言葉に定義を下して、其の内容の範囲を定め、隣りの言葉との間に縄張りをして掛からぬと思想の整理が出来ぬ如くに感じ、到る所に境界を造り、後には斯様な境界が最初から有つたものの如くに思う癖が生じて、終には物と物との間には必ず境界が有ると考えねば合点が出来ぬように成ると見える。言葉と言葉との間の境界は畢竟行政上の区劃の如きもので、整理の必要から云えば、是非とも何所かに定めねばならぬが、実物の方には之に相当する真の境界の無いことを常に忘れてはならぬ。土地の表面にはただ山川、高低があるだけで、何の境も無い所へ、行政上の必要から、県の境、郡の境、町の境、村の境を設ける如くに、実物にはただ差別が有るばかりで、境界の



無い所へ、若干の言葉を割り振り、其の間に縦横に繩を張つて、一々の言葉の領分を定めたに過ぎぬが、実物を離れて、言葉のみを用いて居ると、繩張のみに目が附いて、実物の方にも其所に判然たる境界が有るかの如くに思い込む癖が生じたのであろう。

また人間は指を以て物の数を算え、数に一二三四五と各々名称を付け、十は五の二倍、四は八の二分の一と云う様に勘定し、長さ、広さ、重さを云い現わそうとするに当つては、先ず単位を定めて、其の何倍とか、何分の幾つとか云う言葉を用いる。長さならば、里(約四キロメートル) 町(約一〇九メートル) 間(約一・八メートル) とか、丈(約三メートル) 尺(約三〇センチ) とか云う単位を設け、何里の道とか、何尺の紐とか云うて居るが、一本の紐を見て、目分量で其の長さを測るときには頭の中で、其の紐を一尺づつに境を附けて考える。万事斯様に頭の中で、切つて考える癖が附くと、何物を見ても、之を単位の集合であると見做し、単位と単位との間には、判然たる境界が有る如き感じを有するに至り易い。一昼夜を二十四時間に分け、地球の周囲を三百六十度に分けるなどは、皆境界の無い所へ便宜上、境界を造つたものであるが、此事は誰にも明瞭であるに拘らず、始終用い慣れ見慣れると、其の境界が真に有るかの如き心持ちに成つて、地図や地球儀を見ても、経度緯度の線が縦横に画いてないと、何となく間が抜けた如くに感ずる。赤道の所には矢張り、太い線を引いて、北半球と南半球とを判然と區別して置かぬと承知が出来兼ねる。日常の生活には午前と午後との間には確乎たる境界が有る如くに見做して置く方が都合が宜しい。斯様な次第で、差別の明らかでない所へ、便宜上境界を仮想することも常であるが、之が習慣になると、其の境界を実際有りと思うように成り易い。今日赤道を通過すると聞いて、朝から甲板の上に立つて、一生懸命に海面を眺めて居る乗客の所へ、茶目式の若い船員が来て、赤道は肉眼では到底見られぬから之を貸して上げようと云うて、赤インキで玉(ズレン) に横線を引いた望遠鏡を貸してやった

と云う話を聞いたことがあるが、之は極端な例としても、日常之に似た考えを持つて居る場合は幾らもある。大晦日と元日との間にも何となく判然たる境界がある如き心持ちを禁じ得ない。

## 五

人間の思考力が、今日の程度までに進み、人間の知識が今日の分量までに増したのは主として言葉を用いて考えた結果であることを思えば、言葉が人間に取つて如何に大切なものであるかは、態々論ずるに及ばぬ。理科でも文学でも、宗教でも、芸術でも言葉を離れては到底発達することは出来ぬであらう。併し其の反対に、言葉のために誤られ、言葉のために無益なことに頭を悩ませられた方を考えると、之また決して少なくない。言葉のために誤られるとは即ち境界の無い所に境界が有る如くに思い込むことで、其ため今日までに幾人の大学者が無用な水掛論を闘わしたか到底数えることは出来ぬ。昔からの議論の中で何時までも結着の附かぬものは、多くは、雙方ともに境界の無い所に境界ありと思ひ誤つて、さて其の境界は何所に有るか、互に論じ合うて居るもの様である。

何れの方面でも、研究が進めば進むだけ、益々細かく分解するように成るが、細かく分解すればするだけ、多くの境界線を仮想せねばならぬことに成る。今日までに学問の進歩したのは、主として分解的研究の賜であつて、今後とても、益々分解的研究を進めねばならぬが、一方に分解的研究を努めると同時に、他方には、其の結果を総合することが必要である。而して総合するに當つて、決して忘れてはならぬのは、仮想の境界線を悉く消し去ることである。之を忘れると、分解したものを如何に正しく総合しても旧の通りには成らぬ。学問研究に分解の必要なのは何故かと云えば、之は人間の力に限りが有つて、同時に全部を研究し得ぬ

からである。先<sup>ま</sup>ず幾つかに割<sup>わ</sup>つて、一部分づつ調べて掛<sup>か</sup>かるより外には途<sup>みち</sup>が無く、詳しく調べようと思<sup>お</sup>えば思<sup>お</sup>うほど、先<sup>ま</sup>ず細<sup>こ</sup>かく割<sup>わ</sup>つて掛<sup>か</sup>からねばならぬ。其の有<sup>あ</sup>様<sup>たか</sup>は恰<sup>あた</sup>も一度に口<sup>くち</sup>に入れ兼<sup>あ</sup>ねる大<sup>お</sup>きな煎<sup>せん</sup>餅<sup>べい</sup>を食<sup>く</sup>うに當<sup>あ</sup>つて、先<sup>ま</sup>ず之<sup>これ</sup>を口<sup>くち</sup>に入るだけの大<sup>お</sup>きさに割<sup>わ</sup>つて、一部分づつ片<sup>せん</sup>付<sup>べい</sup>けて掛<sup>か</sup>かるのと少しも違<sup>ちが</sup>わぬ。即<sup>すな</sup>ち割<sup>わ</sup>らねば手<sup>て</sup>に合<sup>あ</sup>わぬ故<sup>ゆ</sup>に割<sup>わ</sup>るのであつて、煎<sup>せん</sup>餅<sup>べい</sup>の方<sup>かた</sup>には決<sup>けつ</sup>して初<sup>はつ</sup>めから割<sup>わ</sup>れ目<sup>め</sup>は無<sup>な</sup>かつた。されば分<sup>ぶん</sup>解<sup>かい</sup>的研究<sup>けんきゅう</sup>の結果<sup>けつが</sup>を如何<sup>いか</sup>に巧<sup>たくま</sup>に継<sup>つ</sup>ぎ合<sup>あ</sup>せても、其の間<sup>ま</sup>に割<sup>わ</sup>れ目<sup>め</sup>の存<sup>ぞん</sup>してある間<sup>ま</sup>は決<sup>けつ</sup>して分<sup>ぶん</sup>解<sup>かい</sup>以前<sup>いぜん</sup>のものと同<sup>どう</sup>一<sup>いつ</sup>ではない。割<sup>わ</sup>れ目を消<sup>け</sup>して仕<sup>し</sup>舞<sup>ま</sup>うてこそ、初<sup>はつ</sup>めて旧<sup>きゅう</sup>と同<sup>どう</sup>一<sup>いつ</sup>のものに成<sup>な</sup>るのである。皿<sup>わ</sup>を二<sup>に</sup>度<sup>ど</sup>数<sup>すう</sup>多<sup>た</sup>の小<sup>せう</sup>片<sup>ぺん</sup>に壊<sup>こわ</sup>して置<sup>お</sup>いて、更<sup>さら</sup>に之<sup>これ</sup>を焼<sup>や</sup>継<sup>つ</sup>ぎしたのでは、決<sup>けつ</sup>して旧<sup>きゅう</sup>の無<sup>む</sup>疵<sup>し</sup>の皿<sup>わ</sup>と成<sup>な</sup>らぬ如<sup>ごと</sup>く、分<sup>ぶん</sup>解<sup>かい</sup>的研究<sup>けんきゅう</sup>の結果<sup>けつが</sup>を継<sup>つ</sup>ぎ合<sup>あ</sup>せても、継<sup>つ</sup>ぎ目<sup>め</sup>が残<sup>のこ</sup>つては、それだけが誤<sup>ご</sup>りである。教育<sup>きよくう</sup>を分<sup>ぶん</sup>つて智<sup>ち</sup>育<sup>いく</sup>、徳<sup>とく</sup>育<sup>いく</sup>、体<sup>たい</sup>育<sup>いく</sup>とするとか、人の体<sup>たい</sup>質<sup>しつ</sup>を分<sup>ぶん</sup>つて粘<sup>ねん</sup>液<sup>えき</sup>質<sup>しつ</sup>、胆<sup>たん</sup>汁<sup>じつ</sup>質<sup>しつ</sup>、何<sup>なに</sup>々<sup>々</sup>質<sup>しつ</sup>、何<sup>なに</sup>々<sup>々</sup>質<sup>しつ</sup>とするとか云<sup>い</sup>うのは皆<sup>みな</sup>差<sup>さ</sup>別<sup>べつ</sup>に注<sup>ちゆ</sup>意<sup>い</sup>して造<sup>ぞう</sup>つた名<sup>な</sup>称<sup>しやう</sup>であるから、之<sup>これ</sup>を逆<sup>さか</sup>にして、教育<sup>きよくう</sup>は智<sup>ち</sup>育<sup>いく</sup>、徳<sup>とく</sup>育<sup>いく</sup>、体<sup>たい</sup>育<sup>いく</sup>の三<sup>さん</sup>区<sup>く</sup>より成<sup>な</sup>ると云<sup>い</sup>うと、それでは唱<sup>てう</sup>歌<sup>か</sup>は何<sup>なに</sup>区<sup>く</sup>に属<sup>ぞく</sup>するかと<sup>の</sup>難<sup>なん</sup>問<sup>もん</sup>も生<sup>な</sup>ずる。幼<sup>よう</sup>年<sup>ねん</sup>、少<sup>せう</sup>年<sup>ねん</sup>、青<sup>せい</sup>年<sup>ねん</sup>等<sup>とう</sup>の間<sup>ま</sup>に明<sup>めい</sup>な境<sup>きやう</sup>界<sup>がい</sup>が無<sup>な</sup>いからと云<sup>い</sup>うて其<sup>その</sup>の差<sup>さ</sup>別<sup>べつ</sup>をも無<sup>む</sup>視<sup>し</sup>して、赤<sup>せき</sup>坊<sup>ぼう</sup>も大<sup>お</sup>人<sup>にん</sup>も同<sup>どう</sup>じ乗<sup>じやう</sup>車<sup>しや</sup>賃<sup>ちん</sup>を取<sup>と</sup>ることは誰<sup>たれ</sup>が考<sup>かう</sup>えても無<sup>む</sup>理<sup>り</sup>である故<sup>ゆ</sup>、五<sup>ご</sup>歳<sup>さい</sup>以下<sup>いげ</sup>は無<sup>む</sup>賃<sup>ちん</sup>、十二<sup>じふに</sup>歳<sup>さい</sup>以下<sup>いげ</sup>は半<sup>はん</sup>額<sup>がく</sup>と云<sup>い</sup>うように所<sup>ところ</sup>々に境<sup>きやう</sup>界<sup>がい</sup>を定<sup>さだ</sup>めて置<sup>お</sup>くことが必<sup>かなら</sup>要<sup>かなら</sup>である通<sup>とお</sup>り、差<sup>さ</sup>別<sup>べつ</sup>ある物<sup>もの</sup>の間<sup>ま</sup>には、無<sup>む</sup>論<sup>ろん</sup>何<sup>なに</sup>所<sup>ところ</sup>かに境<sup>きやう</sup>界<sup>がい</sup>を設<sup>たて</sup>けねばならぬが、此<sup>こゝ</sup>の境<sup>きやう</sup>界<sup>がい</sup>は人<sup>にん</sup>間<sup>かん</sup>が便<sup>べん</sup>宜<sup>い</sup>上<sup>じやう</sup>、造<sup>ぞう</sup>つたものであることを忘<sup>わす</sup>れてはならぬ。

以上<sup>いじやう</sup>述<sup>じゆつ</sup>べた所<sup>ところ</sup>を約<sup>やく</sup>言<sup>げん</sup>すると、初<sup>はつ</sup>めに云<sup>い</sup>うた通<sup>とお</sup>り、「差<sup>さ</sup>別<sup>べつ</sup>は有<sup>あ</sup>り、境<sup>きやう</sup>界<sup>がい</sup>は無<sup>な</sup>し」との一<sup>いつ</sup>句<sup>く</sup>に成<sup>な</sup>る。有<sup>あ</sup>る差<sup>さ</sup>別<sup>べつ</sup>を無<sup>な</sup>しと見<sup>み</sup>るのも誤<sup>ご</sup>りであり、無<sup>な</sup>い境<sup>きやう</sup>界<sup>がい</sup>を有<sup>あ</sup>りと思<sup>お</sup>うのも誤<sup>ご</sup>りである。何<sup>なに</sup>学<sup>がく</sup>問<sup>もん</sup>でも、差<sup>さ</sup>別<sup>べつ</sup>は有<sup>あ</sup>り境<sup>きやう</sup>界<sup>がい</sup>は無<sup>な</sup>しと云<sup>い</sup>う、万<sup>ばん</sup>物<sup>ぶつ</sup>に通<sup>とお</sup>じた根<sup>こん</sup>本<sup>ぽん</sup>の原<sup>げん</sup>理<sup>り</sup>に心<sup>しん</sup>附<sup>ぶ</sup>かぬ様<sup>よう</sup>では、今<sup>いま</sup>後<sup>ご</sup>分<sup>ぶん</sup>解<sup>かい</sup>的研究<sup>けんきゅう</sup>が進<sup>しん</sup>むに随<sup>ず</sup>うて、却<sup>かえ</sup>つて、誤<sup>ご</sup>りの方<sup>かた</sup>に迷<sup>まよ</sup>い込<sup>こ</sup>む虞<sup>おそれ</sup>が無<sup>な</sup>いとも限<sup>かぎ</sup>らぬ。

- 『丘浅次郎集』（「近代日本思想大系」九、筑摩書房、一九七四年九月）所収。
- 読みやすさのために、旧かな遣いは新かな遣いに変更し、適宜振り仮名をつけた。
- 理解を助けるために適宜割注を附した。
- PDF化にはL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X<sub>2 $\epsilon$</sub> でタイプセッティングを行い、dvi<sub>ps</sub>dxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。